自ら考え、伝え合い、高め合う子どもの育成
～聴き合いを通して表現力を伸ばす授業をめざして（２年次）～

周防大島町立森野小学校

Ⅰ　研究の概要

１　研究主題設定の理由

本校では、平成２４年度から、東和地区拡大集合学習（KS 学習）の共通研究課題「自ら考え、伝え合い、高め合う子どもの育成」の下、さまざま副主題を掲げながら、研修を深めてきた。昨年度は東和地区３校各々の副主題を設定し、本校では「聴き合いを通して表現力を伸ばす授業をめざして」として研修に取り組んだ。

本校においては、教科は限定せず、授業のさまざまな場面において、自分の思いを伝える力、表現力に視点を当てて、研修を進めてきた。研究授業、その後の研究協議会への学校運営協議会委員の参加、ワークショップ形式の協議方法に加え、「東和地区〇年生の話し方・聞き方」をさら　に効果的に活用するとともに、「話し方･聴き方あいうえお」などの取組を引き続き行った。ICT 機器を活用した授業づくりも少しずつ進めているところである。

これまでの研究の成果として、子どもの聞こうとする意識は高まりつつあり、友達の考えを理解することはできる。しかし、聞いて思考を深めるまでには至っていない。聞いたことを踏まえて自分の考えを表現する力を伸ばしていくことが課題である。

そこで本年度は、昨年度の成果や課題を踏まえ、副主題は継続とし、さらに研修を深めていく。表現力を伸ばすためには「聴く」へと高めていくことが大切である。「先生の話を聴く」「自分と友達の考えを比べながら聴く」などがある。聞いて終わりではなく、聴いたことを生かして、自分の思いを的確に表現し伝えるという力を高めていくことをめざしたい。「特別の教科　道徳」や外国語科、外国語活動の中でも表現力を生かして、学びやコミュニケーションを深めていけるようにしたいと考える。

また、周防大島町においては、全小学校にタブレット情報端末を導入してコラボノートを用いての意見交換ができるなど、ICT 環境が整いつつある。タブレットや PC ソフトを用いてのプレゼンテーション作りや個別学習など、ICT 機器を効果的に取り入れることで、表現方法の広がりや学力向上に結びつく充実した取組ができるよう研究を深めていきたい。

２　研究仮説

〇　学習活動や教材、学習形態、指導方法を工夫･改善するとともに、友達同士で考えを聴き合う場を設定することにより、関わりが深まり、学習意欲を高めることができるであろう。

〇　タブレット型情報端末や電子黒板などの ICT 機器を効果的に活用することで、よりよく関わりながら、学びを深めることができるであろう。

３　研究の視点

（１）H29 に定めた授業レベルを向上させる授業の展開（対話的で深い学びの追求）

（２）関わりを生かした授業の展開
- 表現方法の一つとしての「話合いの仕方」の活用
- 自分の考えをまとめる時間(書く)、聴き合う時間の確保
- 各学年の人数構成、学習内容に応じた話合いの形態の工夫(ペア、グループ、全体)
- 課題設定や発問の工夫
- 表現方法をサポートする効果的な ICT 機器の活用
  (プレゼンテーションソフト、思考共有アプリ等)

（３）基礎学力の定着に向けた取組の充実
- 各学年、各個人の実態をもとにした学力向上プランの個人カルテの作成と活用、振り返り
- 「やまぐち学習支援プログラム」の活用
  (やまぐちっ子プリント、「個人データ」の活用を含む)
- 基礎学力の定着をサポートする効果的な ICT 機器の活用

（４）話すこと・聞くことについての意識の高揚
- 話すこと・聞くことについての子どもの意識調査（毎学期に１回）
- アンケート結果を生かした授業改善

４　研究の方法

（１）校内授業研究会（年６回）
（２）講師を招へいしての校内研修講座

Ⅱ　研究のあゆみ

期　　日	主　な　内　容
４月　７日（水）	研修計画について（概要）
４月１４日（水）	研修計画について（詳細）指導案の形式について
５月１９日（水）	第１回ユニット型研修（CS 委員と合同の熟議） 校内研修について 　研究の方向性・視点の明確化
６月　９日（水）	第２回ユニット型研修　指導案検討　５・６年　外国語科
６月３０日（水）	第３回ユニット型研修（CS 委員参加） 校内研究授業　５・６年　外国語科「What do you want to be?」 田　中　隆　真　教諭 講師：山口大学教育学部附属光小学校 教諭　石　津　友美恵　様
８月２２日（水）	第４回ユニット型研修　指導案検討　１年　国語科
９月　８日（水）	第５回ユニット型研修（CS 委員参加） 校内研究授業　１年　国語科「はなしたいな　ききたいな」 大　下　悦　子　教諭 講師：周防大島町教育委員会学校教育課 指導主事　坂　井　純　子　様
９月２９日（水）	第６回ユニット型研修　指導案検討 のびのび学級３年 算数科
１０月２０日（水）	第７回ユニット型研修（CS 委員参加） 校内研究授業　のびのび学級３年 算数科「１より小さい数を表そう」 矢　野　勇　樹　教諭 講師：柳井市立柳井小学校　学力向上推進リーダー 教頭　茂　田　幸　恵　様
１０月２７日（水）	第８回ユニット型研修　指導案検討　４年　算数科
１１月１０日（水）	第９回ユニット型研修（CS 委員参加） 校内研究授業　４年　算数科「面積」 酒　井　侑　香　教諭 講師：山口大学教育学部附属光小学校 教諭　山　本　東　建　様
１１月２４日（水）	第１０回ユニット型研修　指導案検討　３年　理科
１２月　８日（水）	第１１回ユニット型研修（CS 委員参加） 校内研究授業　３年　理科「ものと重さ」 松　田　和　芳　教諭 講師：山口大学教育学部附属光小学校 教諭　宮　﨑　洸　佑　様
１月２６日（水）	第１２回ユニット型研修　指導案検討　２年　算数科
２月　９日（水）	第１３回ユニット型研修 校内研究授業　２年　算数科「はこの形」 松　浦　裕　美　教諭 講師：山口大学教育学部附属光小学校 教諭　兼　安　陽一朗　様 教諭　徳　永　真　衣　様
３月１０日（水）	今年度の研修の反省と来年度の方向性の共通理解

Ⅲ　成果と課題

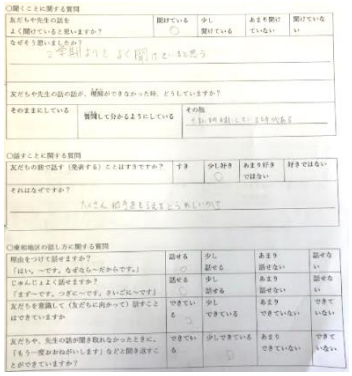
今年度の校内研究では、計６回授業研究を行い、外部講師や学校運営協議会委員を交えて協議を重ねる中で、様々な成果や課題を把握することができた。一年を通して「話すこと・聞くことアンケート」を行い、子どもの実態や意識を調査し、授業改善に生かしてきた。授業実践を行っていく中で、子どもの「話したい」「聴きたい」を引き出し、表現力を伸ばすためには、①問いのもたせ方②話合い時の教師の役割③教材・教具、ICT 機器の活用が大切であることが明らかとなった。

【熟議の様子】

１　成果

（１）話すこと・聞くことアンケート

学期毎に、話すこと・聞くことに関するアンケートについて全児童を対象に行った。アンケートの内容は、①話を正確に聞くことについて②発表することや話し方の技術（正しい話し方、理由を言える、順序よく話せる）について③友達と話し合うことについての３項目である。


【話すこと聞くことアンケート】

<u>アンケート結果より、次の３点に成果が見られた。</u>

①　学期が進むにつれて、話を聞こうとする意識の高まりが見られた。アンケートを実施して振り返る機会をもつことにより、子ども自身が話の聞き方を意識したり、教師が意識して指導したりすることにつながった。

②　「発表することが好き」のポイントが高いクラスは、「話し方の技」の項目ポイントも高い傾向があり、２つの項目に相関関係が見られた。「話し方の技術」を身に付けている子どもは、自信をもって発言できている。

③　どの学年も「友達と話し合うことが好き」のポイントが高く、話合いを通して考えが深まると感じている子どもが多い。また、自由記述より、「発表で間違うと笑われそう」という意見や「発表して友達に理解されるとうれしい」という意見があった。話合いの時は、「自分と違う考えを聞くことができて楽しい」という意見もあった。表現力を伸ばすためには、学習規律、表現の仕方の指導とともに、人間関係を育てることも大切である。懸命に話している子どもが、聞き手の態度次第でその意欲を低下させてしまうことも事実である。素直な考えを表現したくなる風土を創り出す集団づくりが求められる。

（２）子どもの問題解決意欲「問い」を生むための工夫

表現力を育成するためには、子どもの中に「話したい」「聞きたい」という思いを満たすことが大切である。その主体性を生むためには「問い」が必要である。教師の一方的な指示や与えられた課題では、能動的な子どもの姿は期待できない。問いを生むためには、不安定な状態をつくらなければならない。不安定な状態とは「あれ？」「どうして？」「なぜ？」「本当かな？」という状態である。このような状態をどうにかして解決したいと感じた時に子どもは動き出す。

【３年　算数科「小数」】

算数科では、今までぴったり「〇dL」と量ることができていたのにいきなり「はした」の数が登場し、「あれ？」と思わせることで問いが生まれ、「はしたの量をどうにかして表したい」という展開になった。国語科では、「友達の夏休みの思い出を聞く」という課題設定が、子どもの「聞きたい」という意欲の向上につながった。理科では、「友達の意見を発表しよう」と話合いの前に伝えることで、真剣に友達の話を聞こうとする様子が見られた。

【５・６年　外国語「What do you want to be?」】

また、外国語科では、子どもたちが「やりたい」「言えるようになりたい」と思える導入の必要性について議論した。「What do you want to be?」というフレーズを学習する時に、まず、明確にしておきたいことは、目的・場面・状況についてである。いつ、どんな時に使える言葉なのかを意識して学習することで、今後の学習に生

かすことができる。目的を明確にすれば、他者意識も生まれる。これからも問いを大切にした授業づくりを研究し、表現したくなる場面を意図的につくっていかなければならない。

（３）互いの思考を共有できるようにするための工夫と教師の姿勢

子どもたちが自分の考えをもち、友達の話を聴いてみたい、友達に話してみたいという気持ちがあふれたら、思考を共有する時間を設定する。その時に聴き合いを活性化させるためには、教師の心構えや技術が大切になってくる。教師は子どもの意見をつなぐ役目、ファシリテーター役に徹しなければならない。発表をしている子どもではなく、話を聞いている子どもに注目し、「友達はなんと言ったの？」「そうか、と言ったけれど、どんなことを考えたの？」「うなずいていたけれど何が分かったのか教えてくれない？」等と子どもの考えをつなぐ意識が大切である。話合いの際、教師は姿勢を低くし、子どもたちが話合いに集中できるようにすることも大切である。聴き合いの場での主役は子どもである。分からせて覚えさせる授業から、考えさせて判断させる授業へと変えていかなければならない。

２年生の算数科では、話合いを子どもたちに任せ、教師は困ったときにのみ助言するというスタイルで授業を行った。子どもたちだけに任せることは勇気のいることで、子どもたちを信じていなければできない。そのような状況に置かれた子どもたちは、どうにかして自分たちで問題を解決しなければならないという気持ちになっていた。このような経験を積んでいき、話合いを通して子どもの力で問題を解決することができるようにしていきたい。

【2年　算数科「はこの形」】

（４）教材・教具の工夫、ICT 機器の活用

聴き合いを活性化するために、教材・教具を工夫したり、ICT 機器を活用したりした。

１年生の国語科「友達の夏休みの思い出を聞く」授業では、発表の時おはじきを使って、感想を赤、質問を黄色とし、発表回数を可視化することで聴く側の意欲付けになった。また、「発表の仕方」が掲示してあることで、子どもたちは安心して発表をすることができた。

３年生の算数科では、ジュースを注ぐ活動や箱を操作しながら仲間分けをする活動を行った。具体物を操作することで、意欲が高まったり、問いが生まれたりする姿が見られ、改めて操作活動の大切さを実感した。

４年生の算数科では、１人１台端末を活用して授業を行った。タブレット端末に考えたことを記入し、ジャムボードというアプリを使い、クラウド上で考えを共有できるようにした。ジャムボードの有効な点は、一人で思考している時に、友達の考えを参考することができるということである。しかし、有効に活用できるところまでには至らなかったので、今後研究を深めたい。

【4年　算数科「面積」】

２　課題

子どもたちの表現力を伸ばすためには、学年に応じた話し方・聞き方のスキルを向上させるとともに、間違いを認め合える温かい学級づくりが必要である。日々の授業の中で「東和地区〇年生の話し方・聞き方」を活用しながら、一人一人が表現する場をつくったり、友達から聞いたことを「つまり〇〇ということ？」「〇〇と言っていたけれど、～で合っている？」「分からなかったからもう一度言って」等と言える子どもを増やしたりし、一方通行の伝達型から、双方の意見が行き来することで思考が深まる話合いにレベルアップさせていきたい。子どもが素直な気持ちで表現できるように、教師は説明したい気持ちを抑え、子どもたちの言葉にとことん付き合うという覚悟も必要である。

また、子どもの問いを大切にした授業づくりも不可欠である。どうすれば子どもたちが課題を自分事としてとらえ、「自分の考えを伝えたい」「友達の考えを聴いてみたい」と能動的に活動できるのか。そのような授業づくりに今後も取り組んでいきたい。同時に、子どもたちがどのくらい話せるようになったのか、聴けるようになり思考が深まったのかを見取る評価の方法についても研究していきたい。